

## 〔研究ノート〕

住吉広行筆「源氏物語若菜上・帯木図」  
(個人蔵)をめぐって

住吉広行(1755～1811)は、住吉家の五代当主として、江戸時代後期に活躍しました。住吉家はやまと絵を基盤とする絵師の家系で、二代具慶以降、代々江戸幕府に召し抱えられました。2022年秋に大和文華館で開催した特別展「住吉広行—江戸後期やまと絵の開拓者—」において広行を取りあげましたが、本稿では、展覧会でお借りした「源氏物語若菜上・帯木図」(個人蔵、図1)を改めて紹介し、広行のこだわりを明らかにしていきたいと思います。

本作は、源氏物語第三十四帖「若菜上」(季節は春)を右幅、第二帖「帯木」(季節は夏)を左幅とした対幅です。まず左幅の帯木に注目したいと思います。五月雨の降る夜、内裏の物忌みのために宿直所に籠もっていた源氏のもとに友人の頭中将が訪れ、女性たちから源氏に送られた手紙をきっかけとして女性談義が始まり、左馬頭と藤式部丞も加わる場面を描いています。住吉家初代如慶は、四人全員が部屋の中に入った近い場面を描いており(図2)、人物の衣装や調度品などが本作と類似

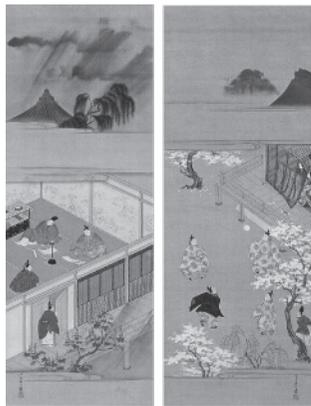


図1 住吉広行「源氏物語若菜上・帯木図」(個人蔵)

していることから、広行は住吉家に伝わる図様を参考にして描いたことが窺えます。如慶作品に描かれる源氏(右上の人物)を見ると、直衣の前を開けてゆるりと着ていますが、これは、源氏物語の本文に、「直衣ばかりを、しどけなく着なし給ひて、紐などもうち捨てて」と源氏の姿が記されているのを反映しています。「しどけなく」というのは衣装を無造作に着崩している様子をあらわしています。如慶と重なる時代に活躍した狩野探幽筆「源氏物語図屏風」(皇居三の丸尚蔵館蔵)の同場面(図3)では、直衣を着崩していないため、源氏と頭中将の区別が付きにくくなっています。直衣を着崩した源氏の姿は、如慶が学んだという土佐光吉の「源氏物語手鑑」(和泉市久保惣記念美術館蔵)にも見られるので、如慶は土佐家の図様を参考にしたのでしょうか。広行の描く本作を見ると(図4/源氏は左上の人物)、直衣を着崩した姿を継承していることがわかります。その一方で、如慶作品や光吉作品では、源氏が指貫(袴の一種)を着ているのに対し、本作では着ておらず、白い衣を垂らしているという相違も見られます。広行が指貫を描かなかったのは、物語本文に「直衣ばかり」という記述があるためと考えられます。直衣だけを着ていると記されているため、指貫は着ていないという解釈ができます。つまり広

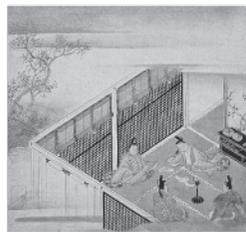


図2 住吉如慶「源氏物語画帖」(サントリー美術館蔵)

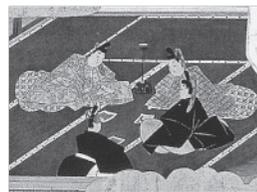


図3 狩野探幽「源氏物語図屏風」部分(皇居三の丸尚蔵館蔵)



図4 図1左幅部分



図5 図1右幅部分

行は、土佐・住吉家の伝統的な図様を踏襲しつつも、より本文に忠実に表現しようとしていることが窺えます。

もう一点注目したいのが、画面下に描かれた樹木の種類です。先述の如慶作品では小さな葉の種類不明の木が、光吉作品では枇杷の木がこの場面に描かれているのに対し、本作では花の咲く桐の木が描かれています。物語本文では、この場面に特定の樹木に関する記述はないので、描かれる木の種類には決まりがありませんでした。ではなぜ広行は桐を描いたのででしょうか。そのヒントは第一帖「桐壺」にあります。「桐壺」帖の最後に、成人した源氏は、母の更衣が使っていた淑景舎を曹司(宿直所)にしたと記されています。淑景舎は、平安京内裏にある建物で、庭に桐が植えられていることから、別名を桐壺といいました。つまり、第二帖「帯木」における源氏の宿直所は桐壺と解釈し、本作では桐が描かれているのです。しかも物語の季節は五月雨の頃。桐の花が咲いている時期です。本文中に桐は登場しませんが、桐を描くことによって、この場面にふさわしい場所と季節が表現されているのです。

続いて右幅の若菜上を見てみましょう。蹴鞠に参加した柏木が、猫によってめくれた簾のすきまより、源氏の幼い妻である女三宮の姿を垣間見る場面です。ここに描かれる蹴鞠をする貴族たちの姿は、「年中行事絵巻」の図様を参考していることが指摘されています。「年中行事絵巻」は平安時代末に後白河院の命により制作された貴重な絵巻でしたが、江戸時代前期に住吉如慶が

模写した後に焼失してしまいました。広行は如慶の模本などを通じて、「年中行事絵巻」をよく学んでおり、その蹴鞠の図様を源氏物語絵に転用したのです。狩野探幽筆「源氏物語図屏風」(皇居三の丸尚蔵館蔵)の同場面でも「年中行事絵巻」の図様が転用されていますが、本作で注目されるのが浅沓の描写です(図5)。沓に紐がぐるりと回されているのがわかります。蹴鞠の際は沓が脱げやすいために、紐を足の甲に回して固定していました。原本が平安時代末に描かれた「年中行事絵巻」ではこの紐が描かれているのですが、浅沓で蹴鞠をする習慣が廃れた江戸時代の源氏物語絵では浅沓を固定する紐まで描く例は珍しく、探幽も紐までは描いていません。広行は古絵巻の模写や、平安時代の行事の研究などを通じて、紐を描く必要性を認識して、しっかりと描き込んだと考えられます。

本作と同じ図様がすでに先代の住吉家四代広守や、広守の弟子で広行の実父にあたる板谷広当によって描かれている可能性は考慮する必要があり、広行が作り上げた新図様とは断言できませんが、定型化した図様にとどまらず、物語本文の記述を丁寧に反映させたり、古絵巻の図様を活用したり、古い時代の風習を反映させたりするこだわりは、広行の大きな特徴と言えます。(宮崎もも)

※図2は『あらすじでたどる『源氏物語』の絵画』(東京富士美術館、2024年)、図3は『絵画でつづる源氏物語』(徳川美術館、2005年)より複写しました。